

付篇

光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物

横山 成己

1. はじめに

山口大学埋蔵文化財資料館は、平成15年度に山口大学教育学部附属光小学校において発掘調査を実施した^{註1}。山口大学光構内は山口県東南部、光市室積の陸繋島（過去において島であったと考えられる峨嵋山が島田川の土砂運搬作用によって半島状に本土と連結した）の北縁海岸部に所在しており、御手洗遺跡・月待山遺跡という周知の埋蔵文化財包蔵地内に位置している。

この両遺跡のこれまでの調査・研究状況に関しては、月待山遺跡はその範囲の大部分が瀬戸内海国立公園内に位置するため現在まで正式な発掘調査は行われておらず、その性格も不明瞭な点が多い。一方御手洗遺跡は山口大学埋蔵文化財資料館の継続的な調査により、複合遺跡としての性格が徐々にではあるが明らかになりつつある。実は、両遺跡は過去において「月待山遺跡」として一括されていた時期があった。

本稿では、月待山遺跡から御手洗遺跡が分離された経緯を振り返るとともに、御手洗遺跡として分離される契機となった教育学部附属中学校体育館建築工事の際に発見された遺物の紹介を行う。

2. 月待山遺跡の発見

月待山遺跡の発見は、昭和25年(1950)にまでさかのぼる。ここで発見の経緯を振り返ると、現在山口大学名誉教授である小野忠 氏が山口大学教育学部光分校(教育学部附属光小・中学校)の海岸を散策中に土師器の散布を認めたことに端を発し、同年と翌年にかけて光分校の学生と共に踏査が実施された。その調査成果は『島田川一周防島田川流域の遺跡調査研究報告一』(以下『島田川』と略記)に詳しく記載されている。調査成果の概要を記すると、踏査の結果土器類の分布は峨嵋山の東北嶺に当たる標高20m余りの月待山付近を中心として、西は教育学部附属光小学校付近から、東は半島の突端部である象鼻岬鉤状砂嘴の中央部にまでわたり、分布域の東西範囲が約500mにおよぶことが判明した。特に月待山の狭い平坦面付近に濃密な土師器の包含層が存在し、一部斜面に露出してたようである。また、この包含層地点から南方約30mの高みに人工的につくられた平坦面があり、この地を取り巻く北半には段状に狭い平坦面がつくられ、西側に小円礫の堆積層があつて微細な土師器の破片を包含しており、過去に採取された円筒埴輪片らしき遺物の存在から、この地に古墳が存在している可能性が示唆されている。

月待山遺跡は、その範囲がほぼ国立公園敷地内であるため考古学的な発掘調査は行われることなく年月を経たが、昭和40年(1965)11月22日、その分布域内に所在する山口大学教育学部附属光中学校の体育館建築工事中に、同校の教諭であつた増本忠一・福本幸夫両氏によって多量の遺物が発見されたのである。

3. 御手洗遺跡の発見

結果的にこの発見が月待山遺跡から御手洗遺跡を分離させる契機となつたのであるが、ここではさらに詳しくその経緯を検討することにする。

そもそも、現在の山口大学光構内での埋蔵文化財の発見は、小野氏の分布調査を遙かさかのぼる昭

和7年(1932)9月のことである。当時、山口大学教育学部附属光小・中学校の前身である山口女子師範学校教諭吉田氏が、除草の際に校庭の東南隅(現在の中学校グラウンド丘陵側付近か)において弥生時代の蛤刃石斧^{註3}を発見した。その後、上述したように小野氏による海岸部での遺物の採取がなされ、丘陵部・海岸部の踏査が実施された。その結果、月待山および光構内周辺に広く遺物が散布している状況が明らかとなり、その分布域を覆う範囲が「月待山遺跡」として発見・認識されるに至ったのである。

『島田川』に掲載されている月待山遺跡の遺物を見てみると、現在の視点からは概ね古代から中世に所属する土師器であるが、角状把手片などやや時代のさかのぼるりうる資料も見られる。また、図示されていないものの記述として象鼻岬(室積半島の先端部)において祝部式土器(須恵器)4点を採取したことが記されている。

つまり『島田川』刊行時点で認識されていた月待山遺跡とは、複数の時期の遺物が広範囲に散布している分布域としての遺跡の一面と、月待山の狭い平坦面付近の濃密な土師器包含層を中心として近隣に古墳の存在が予想できる地点、換言すると時期および遺構の種別を特定しうるポイントとしての遺跡の一面の両者を包括したものであったと言える。

以上の遺跡の認識状況は、昭和40年の光中学校体育館建築工事まで変わらず引き継がれるが、体育館建築工事の際に遺物包含層を発見した福本氏は、氏の著書中に当時の月待山遺跡の性格について以下のように記述している。

本遺跡(筆者注:御手洗遺跡を示す)は、従来「月待山遺跡」の中に含まれていた。なぜならば、月待山には土師器の包含層があり、この包含層は標高20mの高見にあつて、みたらい湾の崖面にかかっている。したがって、ここを中心とした遺物が付属海岸一帯に潮流によって運搬せられたものと考えられていたからである。

しかし、付属海岸一帯(月待山の西端から西北へ孤状海岸が約330m)に散布するこれらの土器片の中には、月待山の土師器以外の種類の土器が多く含まれている点に疑問が残されたまま今日に至っているのであった。

すなわち、月待山の包含層からは土師器だけしか検出しないのに、付属海岸には、同包含層からは検出しない土師器の種類が散布している外、須恵器が含まれているということである。

この福本氏の月待山遺跡に対する疑問が、まさに光中学校体育館建築工事の際に解明したのである。この工事の際に行われた調査の成果は、福本氏自身の記述を要約すると、

- ①附属中学校体育館敷地約600㎡の範囲からは多量に遺物が出土し、遺物包含層が存在する
- ②遺物発見時には工事掘削が終了していたため遺物の出土状況は明らかではないが、各時期の遺物が混在していたと思われる。
- ③遺物包含層の層厚は概して同じ50cmであり、包含層は黒褐色の海成砂礫層である。
- ④遺物の包含状態は、海岸に近い北東部が濃密である。
- ⑤出土遺物には、縄文晩期の口縁部片1点・弥生前期の蓋1点・弥生中期の土器2点・弥生後期の様相の土器3点・土師器多数・須恵器多数・中世と思われる瓦器4点がある。

となる。福本氏は上記の調査成果から、月待山遺跡の海岸部に散布している遺物は、月待山土師器包含層からの流出だけではなく、縄文時代から中世におよぶ長期間の遺物を包含する中学校体育館の包含層も母体となっており、むしろその方が多いと判断するに至った。

また、昭和7年に採取された弥生時代の石斧と月待山包含層は時期的に結びつかないが、この中学校体育館包含層とは結びつくと観念から、従来は月待山遺跡に含まれて考えられていた光附属中学校グラウンドを「御手洗遺跡」と呼ぶことになったようである。この時点をもって、月待山遺跡として認識さ

れていた遺跡の範囲から御手洗遺跡が分離することとなった。現在、月待山遺跡と御手洗遺跡は福本氏が地形等から推定した黒褐色砂礫遺物包含層の範囲の東限を境界線として区分されている。

4. 光中学校体育館出土の遺物

それでは、光中学校体育館建築工事中に発見された包含層出土遺物群は、具体的にどのような種類のもので構成されているのだろうか。

福本氏は自身の著書中に、御手洗遺跡包含層から出土した遺物の写真を20点掲載しており、時代別・種類別に各遺物の説明を行っている。その文末には、「※出土品は付属光小学校に保管中」と記されている。

筆者は平成15年度に附属光小学校で発掘調査を実施した際に、この昭和40年の出土資料の再整理を思い立ち、附属小・中学校の教職員に資料の探索を依頼した。その結果、須恵器3点、弥生土器および土師器17点、瓦1点が発見された。しかしながら、大多数の遺物には出土地・出土年月日などの注記がなされておらず、わずかに弥生土器2点に「岡田」と読める注記がなされているだけであった。また、発見された遺物と福本氏が掲載している遺物写真を見比べても、同一個体と思われるものは見あたらなかった。さらに福本氏の著書中には光市の多数の遺跡が紹介されているが、氏が発見した遺物の多くは「付属光小学校に保管中」と記されているため、これら無注記の遺物を御手洗遺跡出土品として取り扱うことはできなかった。

その後、山口大学埋蔵文化財資料館員の田畑直彦から、『光市文化センター』展示室に御手洗遺跡出土遺物が展示されているという情報を受け、資料調査へ向うこととなった。調査の結果、確かに展示中の遺物は福本氏が著書中に掲載している遺物であり、その他にも収蔵室に「御手洗」と記された遺物コンテナが存在することが明らかとなった。後に福本氏に経緯を窺うと、光市文化センターが設立された際に、小野氏と相談の上、より多くの市民が文化財と触れ合うことができるように附属光小学校に保管されていた遺物を光市文化センターに寄贈されたそうである。以上のような経緯を経て、光市文化センターの御厚意により、遺物を借用・調査させて頂くことができた。

資料の調査方法は、まず遺物への注記の有無・種類を確認することから始めた。遺物中には無注記のものも存在したため、慎重を期して調査対象から除外した。注記の種類としては、中学校体育館の調査が行われた「40.11.22.」という日付が記されたものや、「付中G」(Gはグラウンドの略と考えられる)と記されたものがあり、これらは中学校体育館で検出された黒褐色砂礫遺物包含層出土品と見なしでも良いと判断した。その他に、「御手洗」・「みたらい」・「み」など御手洗遺跡出土と考えられるが出土年月日が不明なもの、また年月日が記載されていても「40.4.25」や「40.10」など調査日以外のものは、御手洗遺跡出土という認識に留めることとした。この注記内容の差については、後に福本氏に直接原因を窺ったが、なにぶん昔のことなので記憶が曖昧であり、遺物の整理途中で中学校体育館包含層出土品とその他御手洗遺跡採集品が不明確になったのかもしれないという回答を頂いた。筆者の資料分類には快諾を頂いたので、ここでは資料を「中学校体育館包含層出土遺物」「その他の御手洗遺跡出土遺物」と区分し報告する。なお、福本氏の著書での掲載の有無に関しては、遺物観察表内に示す。

a. 中学校体育館包含層出土遺物

1は縄文土器浅鉢口縁部片。外面口縁端部下に2条沈線を施す。内面を密に磨く。縄文時代後期末の所産であろう。

2は弥生土器壺蓋。小型品であり、つまみの一部と周縁の一部を欠失する他はほぼ完形である。双頭

のつまみを有し、周縁対角線上2カ所に紐孔2個を穿つ。外面は丁寧にミガキを行った後、タマキ貝により2条単位3カ所に同心円を施文する。同心円文間の文様帯には同じくタマキ貝により鋸歯文を充填する。弥生時代前期。3は弥生土器甕体部片。現状で2条の沈線を有する破片である。調整は外面縦ハケ、内面ナデ。弥生時代前期。4は弥生土器壺口縁部片。頸部沈線部分で破損している。調整は口縁部内外面横ナデ。頸部は外面縦方向のハケ、内面横方向のハケ。弥生時代前期。5は弥生土器壺頸部もしくは高坏部片。現状で外面に斜線文が施されている。弥生時代後期か。6は弥生土器壺底部。平底であり、外面を粗く磨く。弥生時代前期から中期。7は弥生土器甕底部か。底部径は小さく、やや上げ底となっている。外面は丁寧なナデ調整。弥生時代後期。8は壺底部片。大型品の底部であり、丸底に近い平底になるものと思われる。弥生時代中期から古墳時代か。

9は土師器甕口縁部～体部片。やや内湾する口縁部を有する。調整は口縁部内外面横ナデ。体部外面は縦方向のハケ、内面は横方向のケズリ。古墳時代前期から中期か。10は土師器甕もしくは壺口縁部片。口縁端部内面を肥厚させる。外面は横方向のミガキ、内面は横ナデ。11は土師器甕口縁部片。頸部から「く」の字状に屈曲して開く形態である。外面は横ナデ、内面は横方向のハケ。古墳時代前期から中期。12は土師器小型壺。外面丹塗りであり、内面は粘土接合痕が明瞭に残る。外面縦方向のハケ、内面ナデ。古墳時代。13は器種不明土師器。形状から竈形土器の基底部片である可能性が高い。外面は斜め方向の平行タタキ、内面は横方向のハケ。14も器種不明土師器。外面はハケ後ナデ、内面はケズリ。端部にハケ調整が残る。やはり竈形土器片か。26は須恵器甕頸部片。大型品であり、頸部上方に現状で3条の沈線が廻る。沈線下には波状文を施す。調整は外面カキ目およびナデ、内面は横ナデ。古墳時代中期から後期。33は須恵器甕もしくは壺体部片。外面平行タタキおよびカキ目、内面は同心円当て具痕がナデ消されている。

b. その他の御手洗遺跡出土遺物

15は弥生土器壺底部。底端部は欠失しているが、平底になるものと思われる。調整は外面が縦方向のハケ、内面はナデ。弥生時代前期から中期。16は弥生土器壺底部片。丸底に近い平底に復元される。外面調整はナデであるが部分的に縦方向のハケが残る。内面はナデおよび縦方向のケズリ。弥生時代中期か。17は弥生土器甕底部。底端部をやや外方向に突出させた上げ底である。調整はない外面ナデ。弥生時代後期。

18は土師器甕口縁部。やや内湾する口縁形態であり、外面は強い横ナデにより凹状にくぼむ。やや異質の形態であるが、古墳時代前期から中期に該当する資料であろう。19は須恵器模倣土師器の甕口縁部と考えられる。精選した粘土を用いている点において他の土師器とは異なる。調整は内外面横ナデ。古墳時代中期から後期か。20は土師器高坏部片。脚部との接合のための棒状刺突痕が残る。外面調整は放射線状のミガキ。内面は剥離が激しく観察できない。古墳時代中期。21は土師器小型壺底部。厚手の平底に近い丸底であり、内面には粘土接合痕が明瞭に残る。外面には部分的に丹塗りが残る。22・23は土師器甕体部片。調整は外面ハケ、内面ナデ。両者とも外面に煤が付着している。24は外面に丹塗りを施した土師器甕体部片。調整は外面ハケ、内面ナデ。25は土師器甕頸部から体部片。調整は外面横方向の平行タタキ、内面はナデ。古墳時代前期か。27～32・34・35は須恵器甕もしくは壺体部片。外面カキ目および平行タタキ、内面は同心円当て具痕がナデ消されている調整方法は中学校体育館包含層出土遺物33と同様であり、同一個体である可能性がある。36～38は須恵器体部片であるが器種不明。同一個体と考えられるが、器形から小型壺などが考えられる。調整は内外面横ナデ。39・40は角状把手。いずれもナデ調整が行われており、断面形態は39がいびつな方形、40が楕円形である。

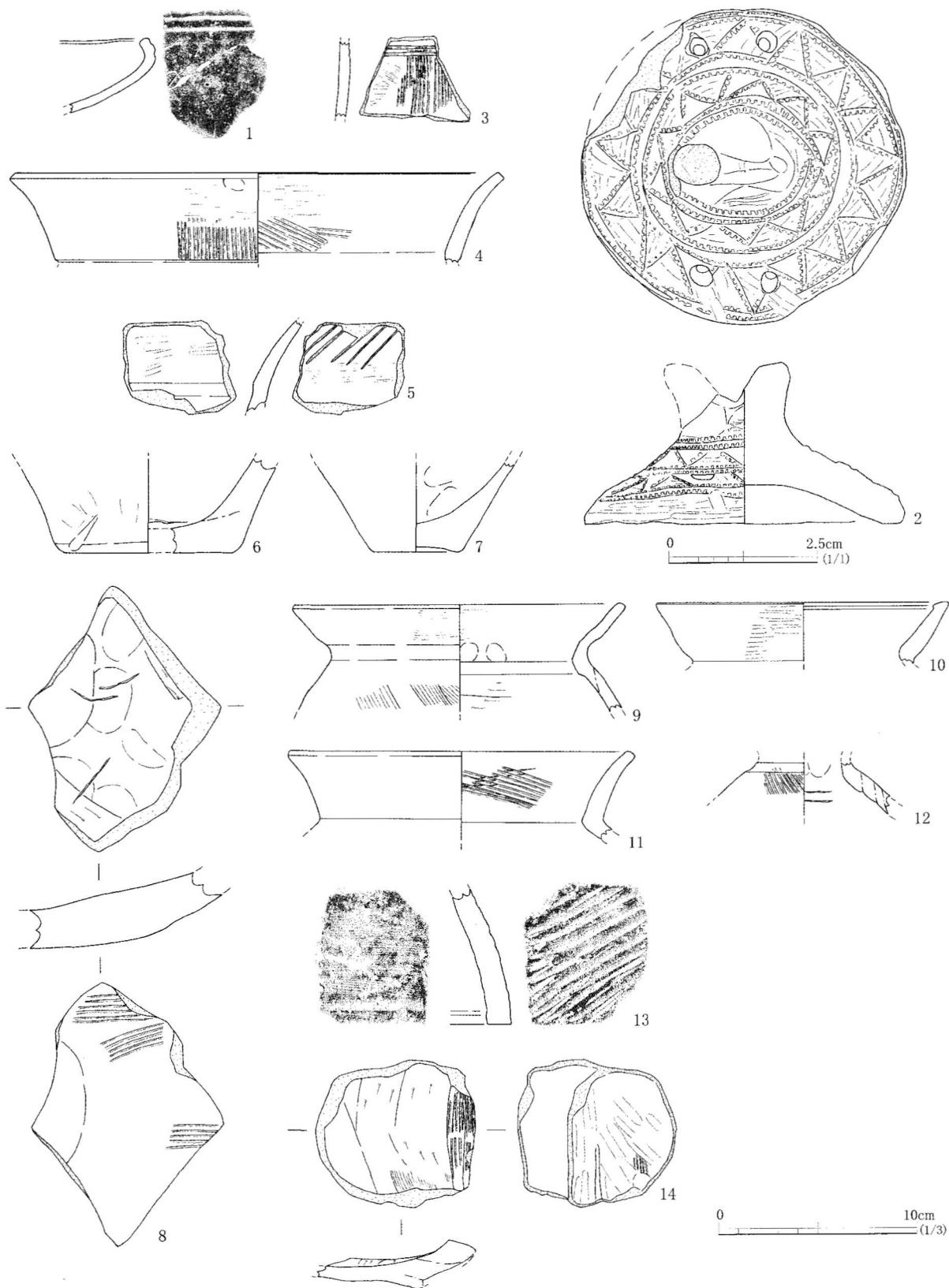


図 31 光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物①(中学校体育館包含層出土遺物)

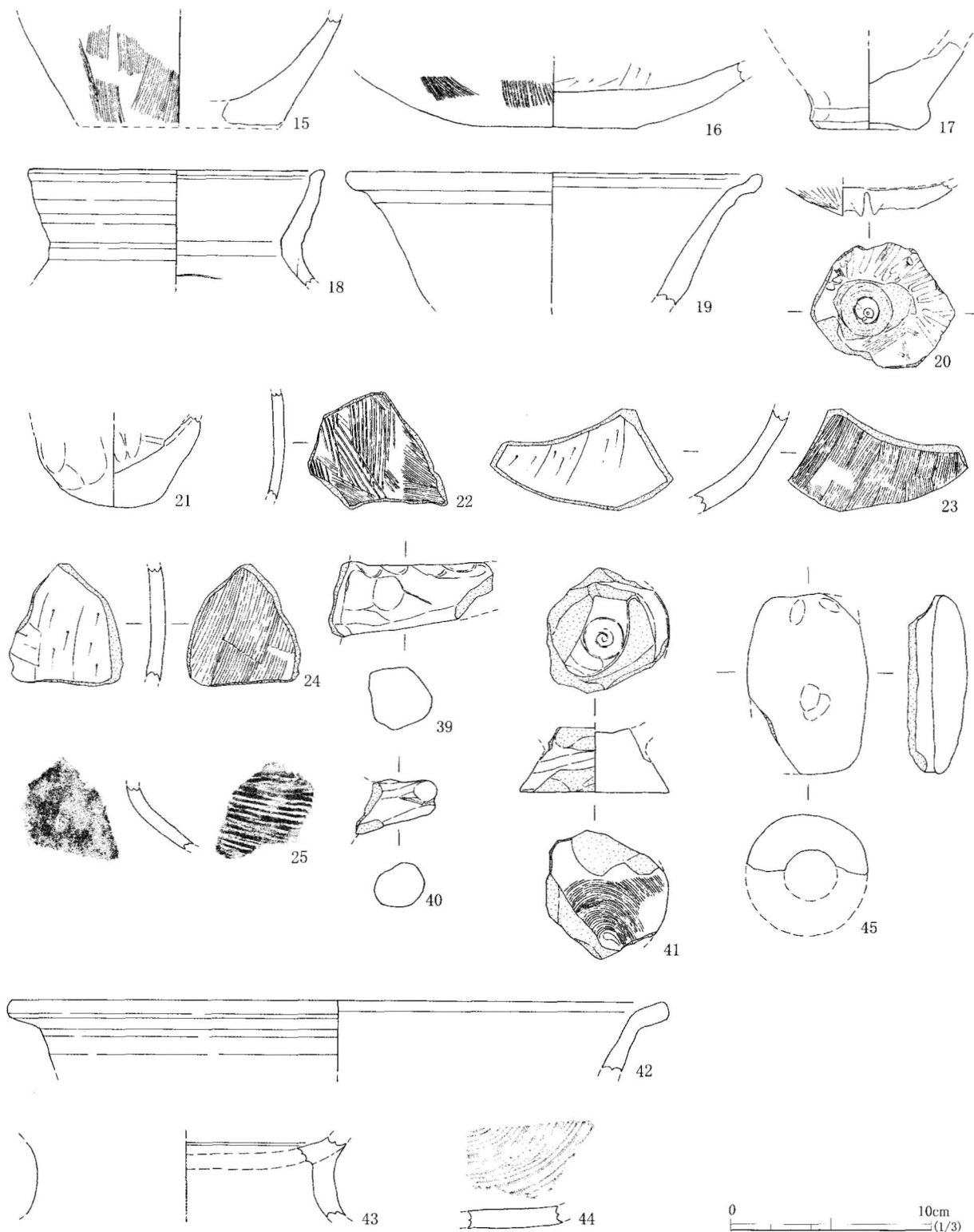


図 32 光市文化センター所蔵の御手洗移籍出土遺物②

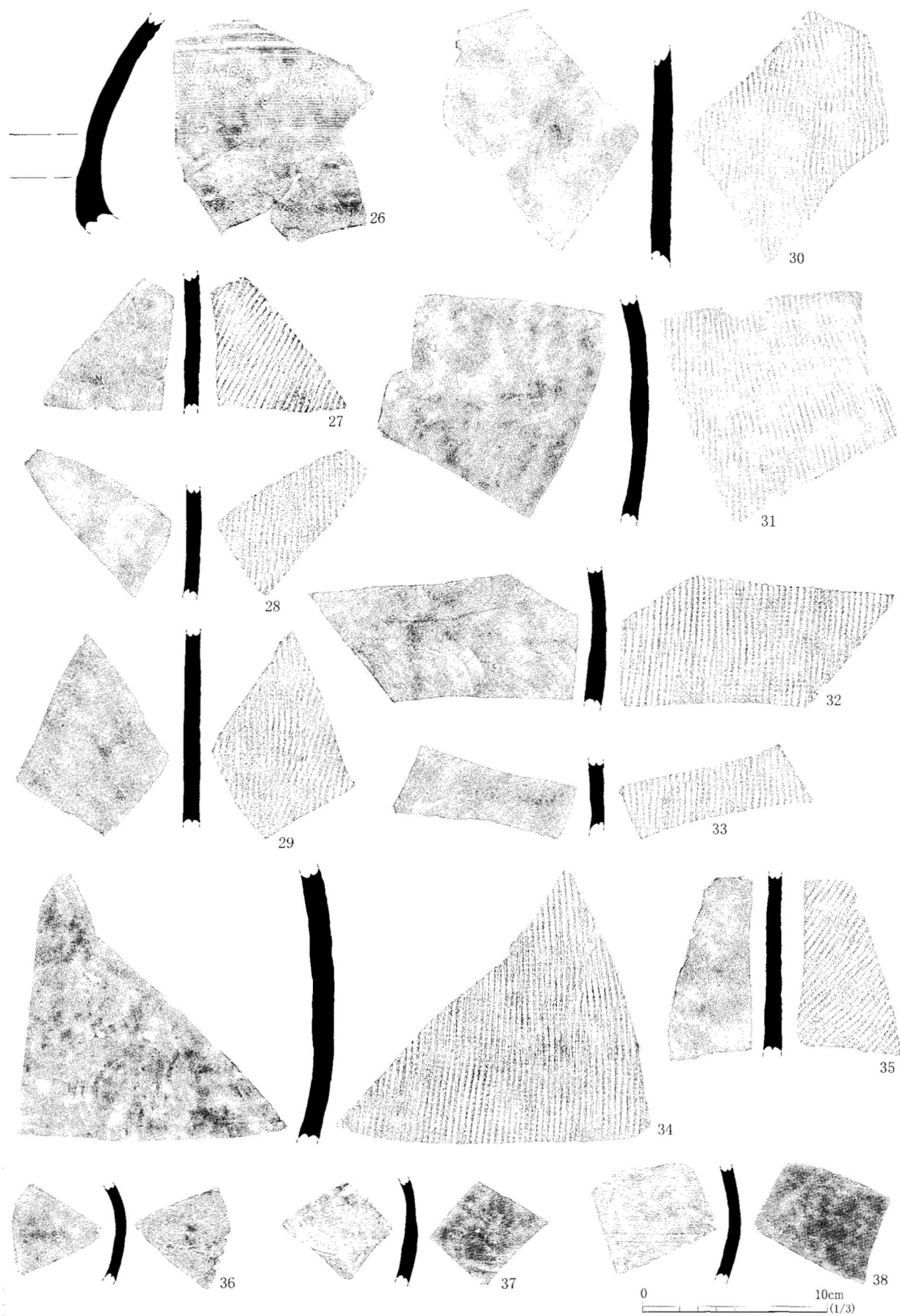


図 33 光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物③(中学校体育館包含層出土遺物を含む)

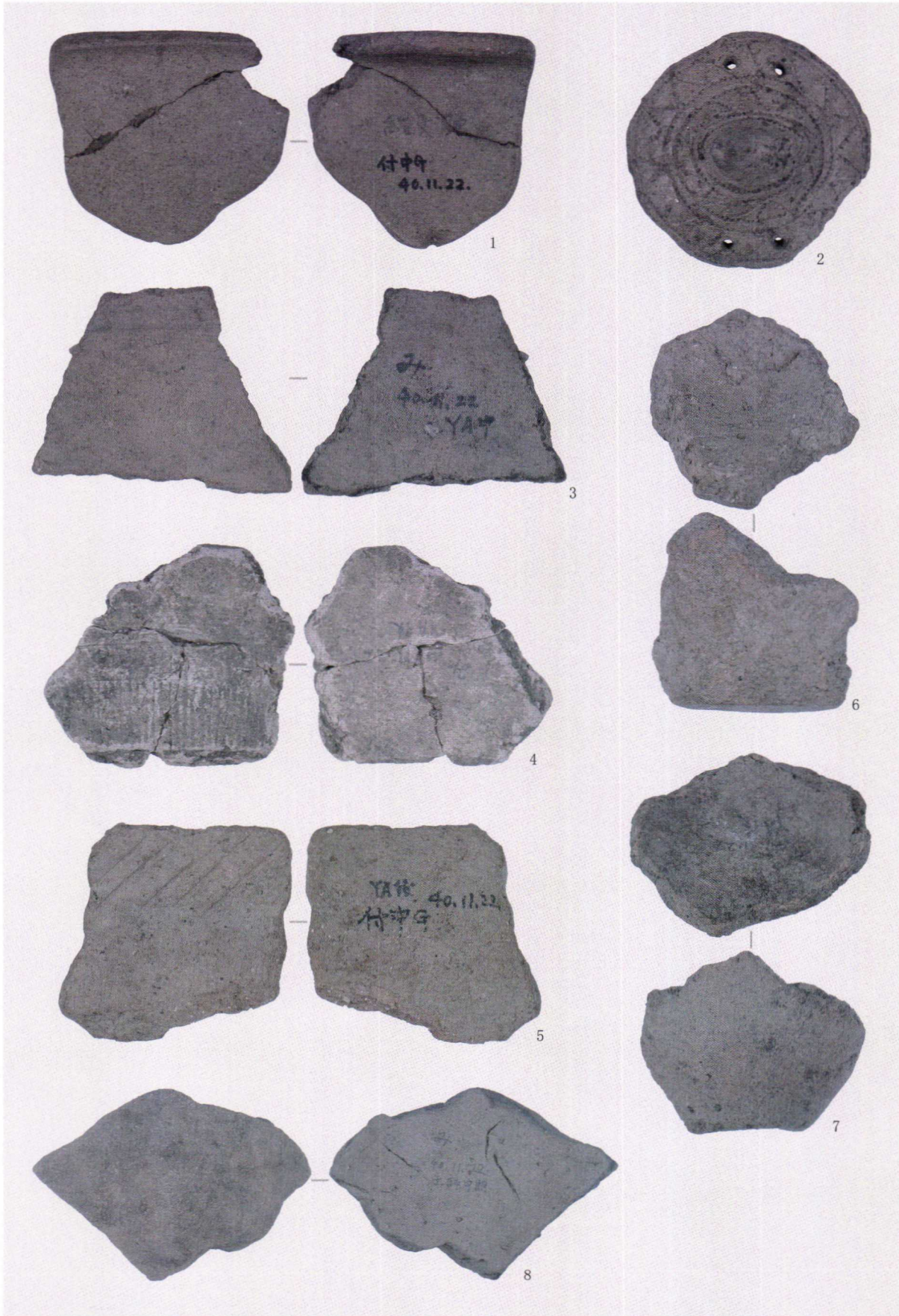


写真 53 光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物①(中学校体育館包含層出土遺物)

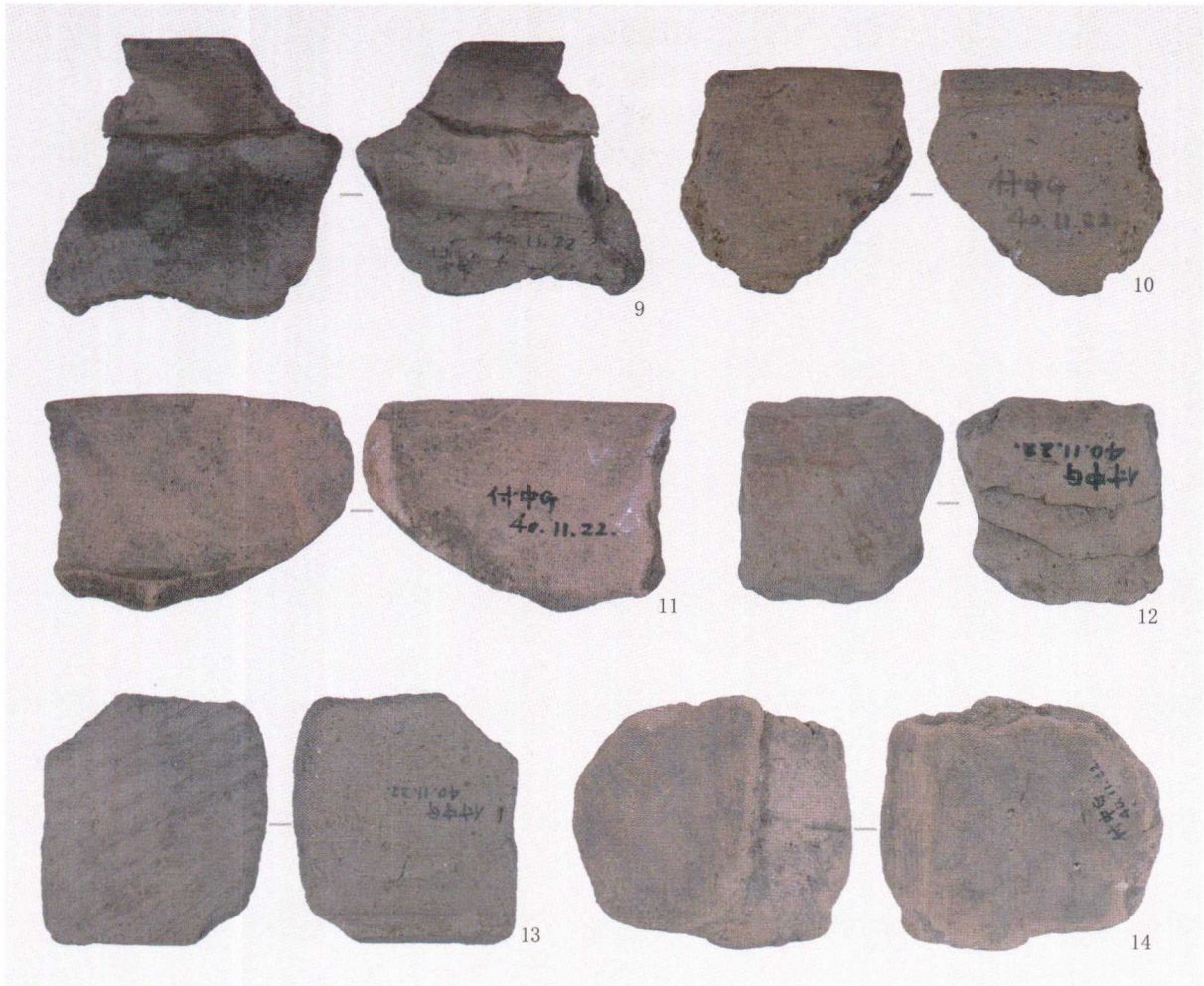


写真 54 光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物②(中学校体育館包含層出土遺物)

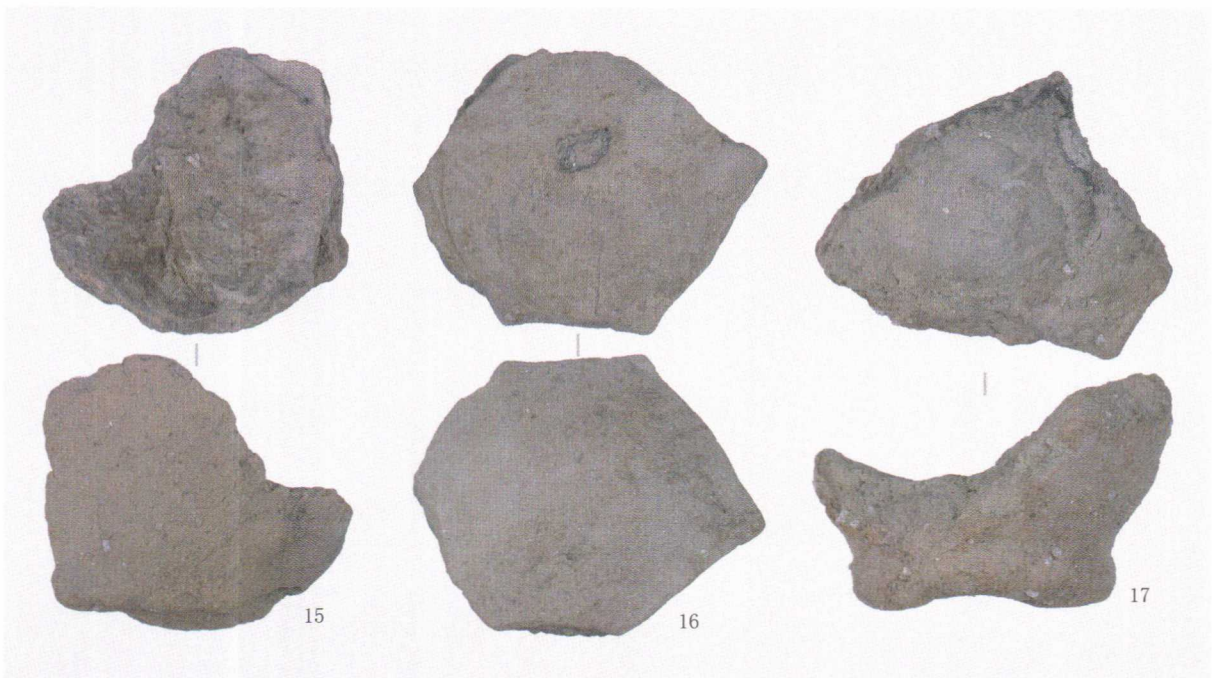


写真 55 光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物③

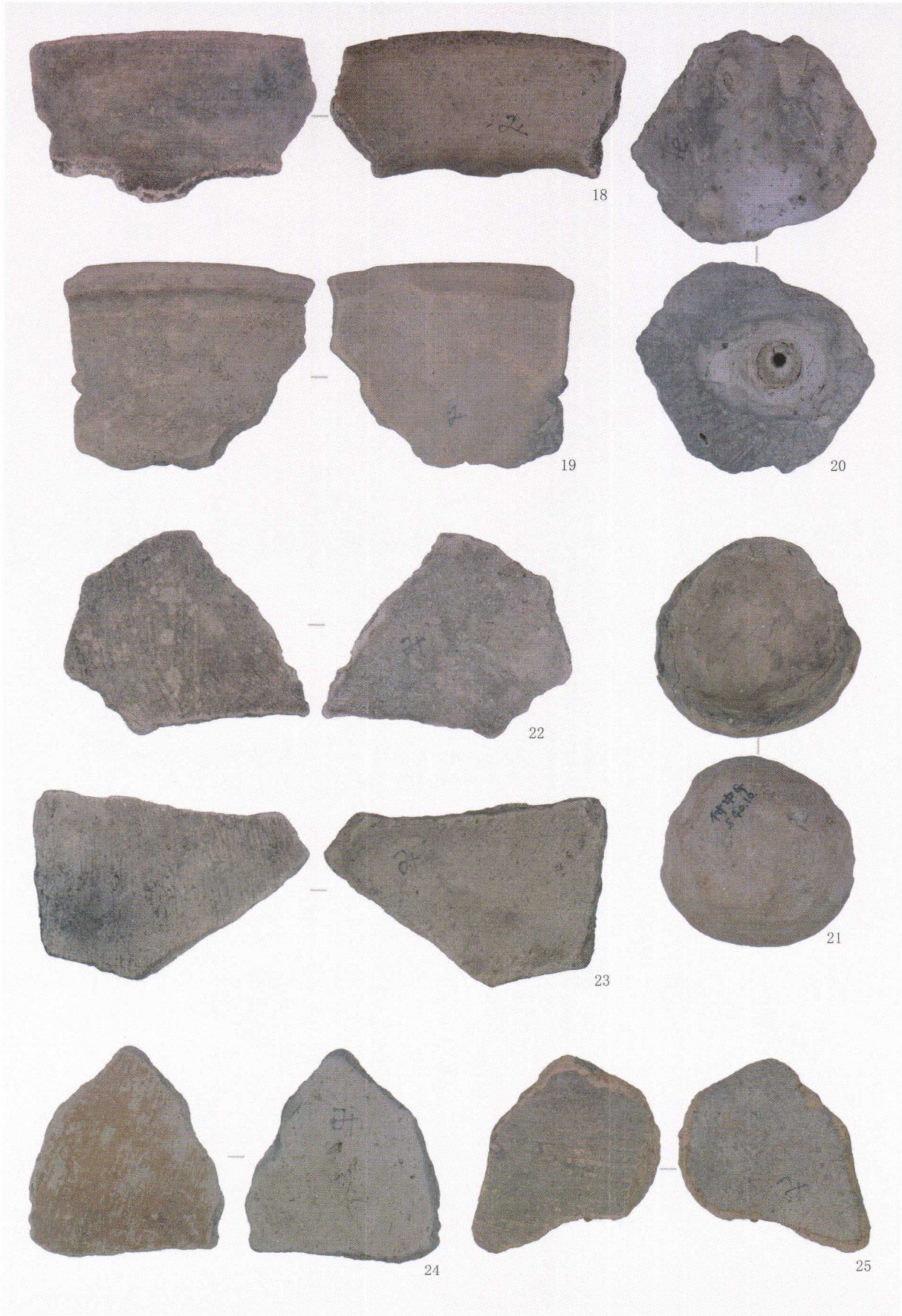


写真 56 光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物④

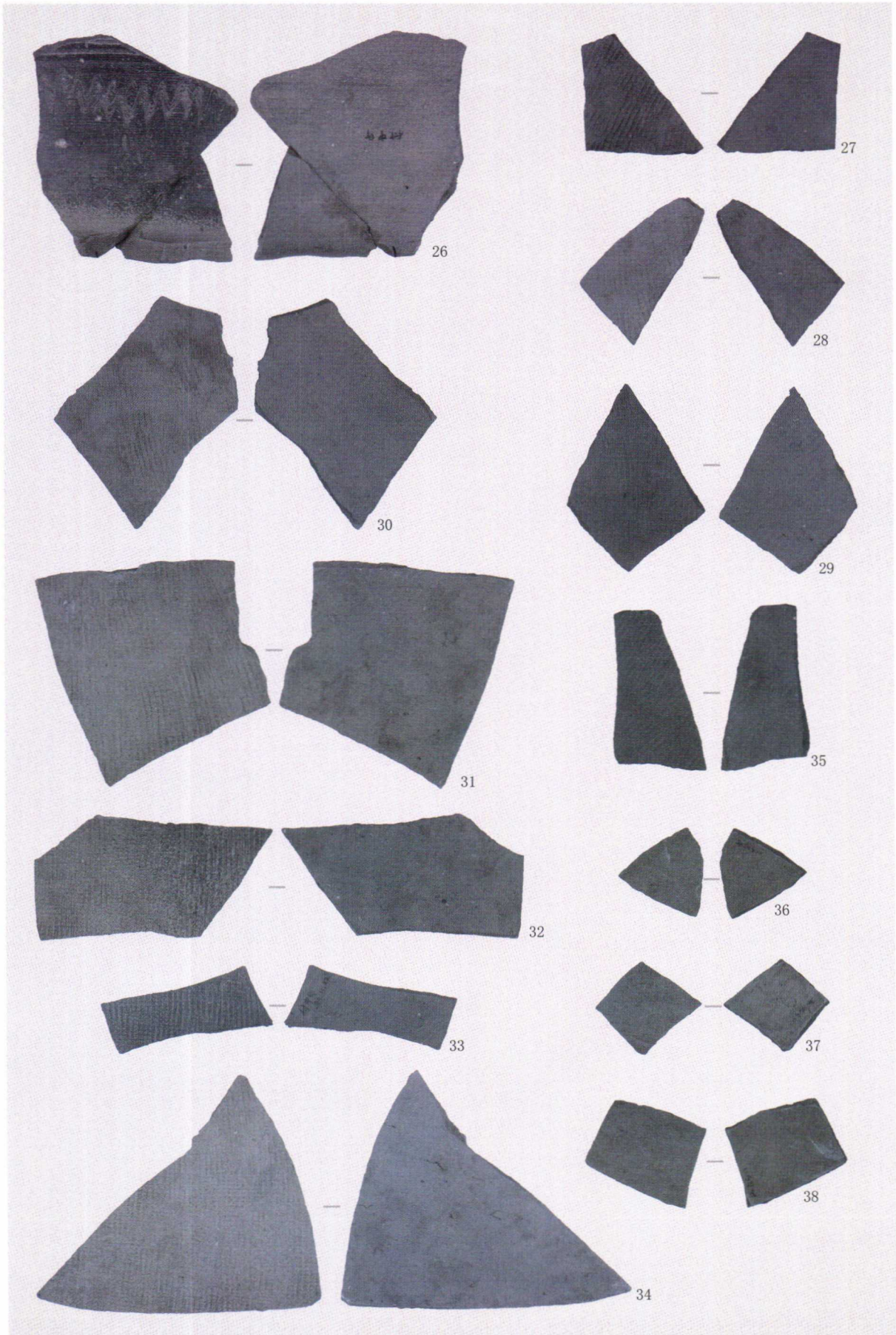


写真 57 光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物⑤(中学校体育館包含層出土遺物を含む)



写真 58 光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物⑥

表10 光市文化センター所蔵御手洗遺跡出土遺物観察表

法量()は復元値

遺物 番号	器種	部位	法量(cm)		色調		胎土	注記	福本氏 著書の 掲載	備考
			①口径	②底径	③器高	①外面				
1	縄文土器 浅鉢	口縁部				①②鈍い黄橙色(10YR6/3)	精緻 0.1~0.5mmφの細砂粒 少量混ざる	縄文晩 付中G 40.11.22.	○	
2	弥生土器 壺蓋		①5.4	③2.7		①②鈍い黄橙色(10YR6/4)	精緻 0.5~2mmφの砂粒 少量混ざる	付中G 40.11.22.	○	タマキ貝腹部による 同心円文・鋸歯文
3	弥生土器 甕	体部				①橙色(7.5YR6/6) ②にぶい黄橙色(10YR6/3)	精緻 0.5~2mmφの砂粒 少量混ざる	み 40.11.22 YA中	○	
4	弥生土器 壺	口縁部	①(20.2)			①②浅黄色(2.5Y7/3)	精緻 0.5~3mmφの砂粒 少量混ざる	み 40.11.22 YA後	○	
5	弥生土器 壺または 高坏	頸部 または 口縁部				①②にぶい橙色(7.5Y7/4)	精緻 0.1~1mmφの細砂粒 少量混ざる	YA後 40.11.22. 付中G	○	
6	弥生土器 壺	底部	③(8.4)			①橙色(7.5YR6/6) ②にぶい黄橙色(10YR7/4)	やや粗 0.1~3mmφの砂粒 やや多く混ざる	40.11.22 み YA中	○	
7	弥生土器 甕か	底部	③(4.6)			①にぶい橙色(7.5YR6/4) ②灰褐色(7.5YR6/2)	精緻 0.1~0.5mmφの細砂粒 少量混ざる	み 40.11.22 YA後	○	
8	土師器 壺	底部				①橙色(7.5YR7/6) ②にぶい黄橙色(10YR7/4)	精緻 0.5~2mmφの砂粒 少量混ざる	み 40.11.22. 土師中期	○	底部外面に砂粒 多く付着
9	土師器 甕	口縁部 ~体部	①(16.8)			①にぶい黄褐色(10YR5/3) ②にぶい褐色(7.5YR6/3)	精緻 0.5~2mmφの砂粒 やや多く混ざる	み 40.11.22 土師中半	○	
10	土師器 甕か	口縁部	①(14.4)			①②橙色(7.5YR7/6)	やや粗 0.5~1mmφの砂粒 やや多く混ざる	付中G 40.11.22.		
11	土師器 甕	口縁部	①(17.4)			①②橙色(7.5YR7/6)	精緻 0.5~2mmφの砂粒 少量混ざる	付中G 40.11.22.		
12	土師器 壺	頸部~ 体部				①②にぶい橙色 (7.5YR7/3)	精緻	付中G 40.11.22.	○	外面丹塗
13	土師器 竈形土器 か	基底部 か				①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②にぶい橙色(7.5YR6/4)	精緻	付中G 40.11.22.		
14	土師器 竈形土器 か					①②橙色(7.5YR6/6)	精緻 0.5~2mmφの砂粒 少量混ざる	付中G 40.11.22.		
15	弥生土器 壺か	底部~ 体部				①にぶい黄褐色(10YR5/4) ②にぶい橙色(7.5YR6/4)	やや粗 0.5~3mmφの砂粒 やや多く混ざる	み		
16	弥生土器 壺	底部	③(8.2)			①②にぶい黄橙色 (10YR6/4)	精緻 0.5~3mmφの砂粒 多く混ざる	み		
17	弥生土器 甕	底部	③2.9			①明赤褐色(2.5YR5/6) ②浅黄色(2.5Y7/4)	精緻 0.5~3mmφの砂粒 やや多く混ざる	み		
18	土師器 甕	口縁部	①(14.6)			①②にぶい橙色 (7.5YR7/4)	精緻 0.5~1.5mmφの砂粒 少量混ざる	み		外面煤付着
19	土師器 甕	口縁部	①(23.0)			①②橙色(7.5YR7/6)	精緻	み		須恵器模倣
20	土師器 高坏	坏部				①②褐灰色(10YR5/1)	精緻 0.1~1mmφの細砂粒 少量混ざる	み	○	
21	土師器 小型壺か	底部~ 体部				①②橙色(5YR6/6) (丹塗)明褐色(2.5YR5/8)	精緻 0.5~8mmφ粗の砂粒 少量混ざる	付中G S40.10.	○	外面丹塗
22	土師器 甕	体部				①にぶい褐色(7.5YR5/4) ②にぶい黄褐色(10YR5/3)	精緻	み		外面煤付着
23	土師器 甕	体部				①にぶい黄橙色(10YR6/4) ②黄褐色(10YR5/6)	精緻 0.5~2mmφの砂粒 少量混ざる	み		外面煤付着
24	土師器 甕	体部				①(丹塗)明赤褐色 (2.5YR5/6) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	精緻	み		外面丹塗

遺物 番号	器種	部位	法量(cm)		色調		胎土	注記	福本氏 著書の 掲載	備考
			①口径	②底径 ③器高	①外面	②内面				
25	土師器 甕	頸部～ 体部			①②灰黄色(2.5YR6/2)		精緻	み		
26	須恵器 甕	頸部			①暗灰色(N3) ②灰色(N6)		精緻 0.1～5mmφの細砂粒 少量混ざる	付中G	○	
27	須恵器 甕	体部			①②灰色(N6)		精緻 0.1～2mmφの細砂粒 少量混ざる	み	○	
28	須恵器 甕	体部			①青灰色(5B6/1) ②灰色(N5)		精緻 0.1～3mmφの細砂粒 少量混ざる	みたら		
29	須恵器 甕	体部			①②灰色(N5)		精緻 0.1～2mmφの細砂粒 少量混ざる	み		
30	須恵器 甕	体部			①黄灰色(2.5Y6/1) ②灰色(N6)		精緻 0.1～1mmφの細砂粒 少量混ざる	み		
31	須恵器 甕	体部			①黄灰色(2.5Y6/1) ②灰色(N5)		精緻 0.1～3mmφの細砂粒 少量混ざる	み		
32	須恵器 甕	体部			①灰色(N4) ②灰色(N5)		精緻 0.1～2mmφの細砂粒 少量混ざる	み		
33	須恵器 甕	体部			①灰色(N4) ②灰色(N5)		精緻 0.1～2mmφの細砂粒 少量混ざる	付中G 40.11.22.	○	
34	須恵器 甕	体部			①褐灰色(10YR6/1) ②灰色(N5)		精緻	み		
35	須恵器 甕	体部			①灰色(N5) ②灰色(N6)		精緻 0.1～2mmφの細砂粒 少量混ざる	み		
36	須恵器	体部			①灰色(N6) ②灰色(N7)		精緻	みたら		
37	須恵器	体部			①灰色(N6) ②灰色(N7)		精緻	みたら		
38	須恵器	体部			①②灰色(N7)		精緻	みたら	○	
39	土師器 角状把手	把手			にぶい黄橙色(10YR6/4)		精緻 0.5～3mmφの砂粒 少量混ざる	み		
40	土師器 角状把手	把手			橙色(7.5YR7/6)		精緻 0.5～2.5mmφの砂粒 少量混ざる	み		
41	土師器 台付皿	台部			にぶい橙色(7.5YR7/4)		精緻	み		台底部糸切り
42	瓦質土器 鍋か	口縁部	①(32.2)		①黒色(7.5YR2/1) ②橙色(7.5YR7/6)		精緻	みたら 瓦器 40.4.25.	○	
43	瓦質土器 火鉢か	台部～ 体部			①②にぶい黄橙色 (10YR6/3)		精緻	みたら 瓦器 40.4.25	○	
44	瓦質土器	底部			①②褐灰色(10YR5/1)		精緻	みたら 瓦器 40.4.25	○	
45	土錘		全長8.9 最大径(6.0) 孔径(2.6)		①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)		精緻 0.5～5mmφの砂粒 多量混ざる	み み	文章中 に 記述	海岸汀線散布地で 採取

41は土師器台付皿の台部片。底面には糸切り痕が見られる。古代末から中世初頭か。42～43は瓦質土器。42は鍋の口縁部片。43は底部から脚部片であるが、器種不明。火鉢か。44は底部片。内面に回転させた強いハケ目痕が残る。45は土師質焼成された土錘。全長8.9cmの大型品であるが、これは福本氏により海岸汀線散布地で採取されたことが記されている。

5. 中学校体育館包含層の性格(図34・35)

光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物の整理を行った結果、中学校体育館で検出された黒褐色砂礫遺物包含層には現状では明確な古代以降の遺物が存在しないことが明らかとなった。^{註7}この事実には、非常に大きな問題が内包されているものと考ええる。

御手洗遺跡は、昭和40年の発見以降山口大学埋蔵文化財資料館によって継続的な調査が行われてきた。その結果、徐々にではあるが複合遺跡としての性格が明らかとなりつつある。遺構面が確認された主な調査を挙げると、平成2年(1990)に附属小学校体育館北東側で実施された調査(図34地点①)では、上下2面にわたる古墳時代後期の遺構面が検出されており、遺構としては土壌が確認されている。^{註8}平成3年(1991)から平成4年(1992)にかけて附属中学校武道館建設地で実施された調査(図34地点④)では、中世遺構面と共に同じく古墳時代後期の遺構面が検出され、遺構としては土壌が確認されている。^{註9}また平成15年(2003)に小学校校舎周りで実施された調査(図34地点②③)でもやはり古墳時代後期と考えられる遺構面が検出され、土壌、ピット群が確認されている。^{註10}これらの地点で検出された遺構の出土遺物は極めて少なく、細片資料が多いためその所属時期に関しては慎重でなくてはならないが、時期が推定できる数少ない資料(土師器・須恵器)から見ると、6世紀後半代を中心とする遺構群である可能性が高い。また、これらの地点では、遺構面を覆う堆積土および遺構面が形成されている基盤層中から遺物が出土するが、時期の特定が可能な遺物はいずれも古墳時代後期後半から古代・中世・近世のものであり、弥生時代以前の遺物を含まないことが特徴と言える。^{註11}

一方、中学校体育館包含層出土遺物を見ると、縄文時代後期末の土器を1点含むが弥生時代から古墳時代にかけてのものが中心をなしており、土師器資料には確実に6世紀後半にまで時期の下る資料と言えるものはない。また須恵器資料(33)の特徴としては、甕もしくは壺体部内面の同心円当て具痕が丁寧にナゲ消されており、参考資料としての取り扱いとなるがその他の須恵器資料(27～32、34・35)も同様の特徴が見られる。対照的に①～④地点出土の須恵器甕もしくは壺体部内面には同心円当て具痕が明瞭に残る。

山口大学埋蔵文化財資料館は、この黒褐色砂礫遺物包含層と同一の堆積層と考えられる土層を平成11年(1999)の立会調査で確認している。調査位置は中学校体育館の北西側に近接する地点であり、福本氏の予想包含層西側限界線に接する位置である(図34地点5)。この調査では、現地表下約145cmで青黒色砂層が検出された。この砂層は層厚が約45cmであったが、層中から大量の遺物が出土した。遺物の種類としては土師器、須恵器類が中心であるが、竈形土器も出土している。^{註12}これらの遺物の所属時期に関しては、須恵器蓋坏類で見ると6世紀代初頭の特徴を有しており、包含層形成時期の一つの指標になりうるものと思われる。

以上のような調査成果から考えると、現在までに確認されている古墳時代の遺構の形成年代と、中学校包含層中遺物群の下限年代には、古墳時代の後期(6世紀代)中を境とする年代差が存在する可能性が高いのではなかろうか。換言すると、中学校体育館包含層中遺物群の母体となっているのは、小学校校舎周辺および中学校武道館建物が所在している峨嵋山支丘北面の内湾部に形成された古墳時代

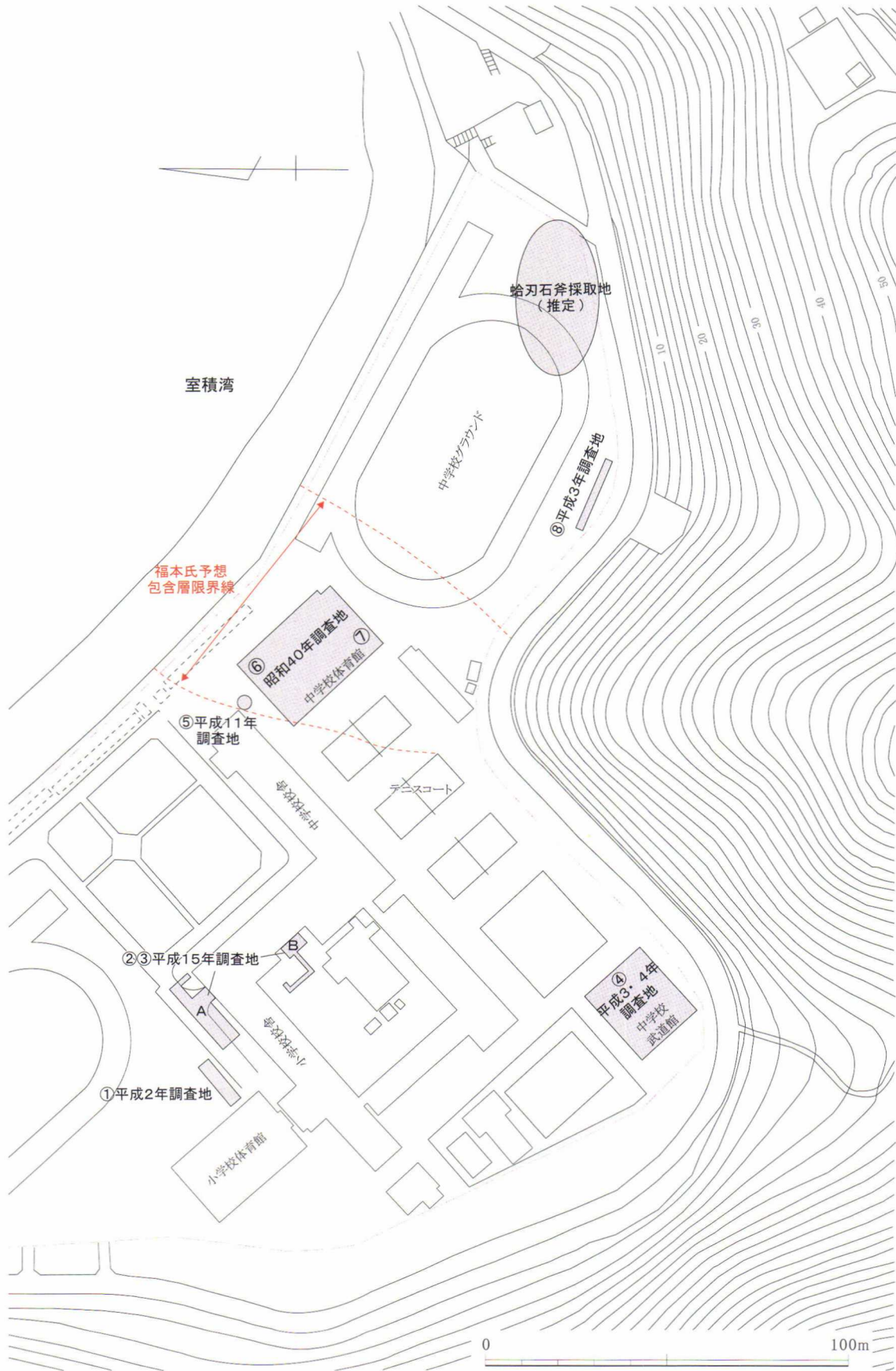


図 34 御手洗遺跡・月待山遺跡主要調査位置図 (※註4 文献第7 図に現在の地図を合成・加筆)

後期後半の遺構群ではなく、テニスコートや中学校グラウンドが所在する支丘の張り出し部付近からさらに東方にかけての範囲に過去に存在していた弥生時代前期から古墳時代後期初頭の集落等という可能性はないであろうか。

事実福本氏はその著書中に、「包含層は峨嵋山麓(グラウンドの南側)から海岸に向かって、さらに月待山側(グラウンドの東側)から西の校舎側に向かって、それぞれ傾斜しているが、その厚さは概して同じ50cmである。」と記述している。つまり、包含層は同じ厚みをもって南東側から北西側に降下していたということになる。また、氏の記述から昭和40年調査の土層断面を復元したものと、平成11年調査の土層断面を模式化したものが図35下段の土層柱状図である。両調査とも海拔高の測量がなされていないため包含層上面の絶対高は導き出せないが、現状地形は平坦地であり、現地表面の海拔高はおおよそ3mである。この柱状図から見ても、やはりこの遺物包含層は西に位置する内湾地形部からの流入堆積ではなく、南部から南東部にかけての丘陵部から流入堆積と考えるのが妥当ではなかろうか。昭和7年の蛤刃石斧採取地が中学校グラウンドの南東部と考えられることも、この推定の補強材料となるものと考えている。

6. まとめ

以上、御手洗遺跡が成立する契機となった昭和40年調査の出土資料を整理すると共に、山口大学埋蔵文化財資料館が現在までに実施した発掘調査成果を用い、現在の視点から中学校体育館黒褐色砂礫遺物包含層がどのように位置付けられるかについて考察を行った。

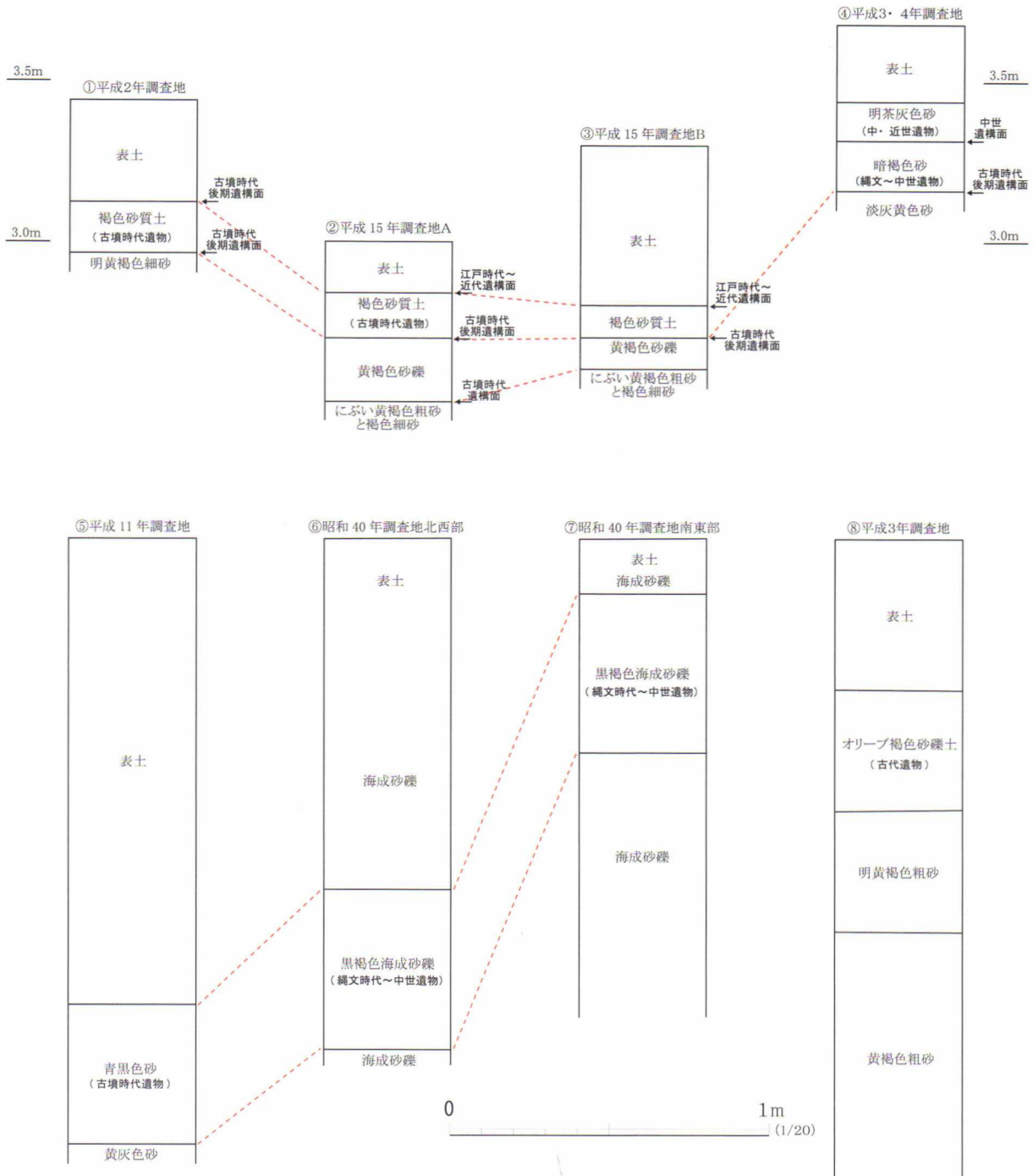
前述したように、そもそも御手洗・月待山遺跡は過去において「月待山遺跡」として一括されていた。しかしながら、月待山の狭い平坦地に形成されている遺物包含層(土師器だけが包含されているらしいが、所属時期などは不明)および古墳と考えられる地点と、海岸域で採取される遺物の内容には大きな違いが見られることもまた事実であった。この疑問点に対し、昭和40年の調査による遺物包含層の確認で一応の解答が得られることとなり、その遺物包含層の南東側予想包含層限界線を持って以東を「月待山遺跡」、以西を「御手洗遺跡」とする見解が生じたのである。

今回昭和40年の調査で出土した資料と山口大学埋蔵文化財資料館がこれまでに実施した調査成果を検討した結果、筆者は山口大学光構内においてはむしろ北西側予想遺物包含層限界線をもって遺跡の内容が区分されるのではないかと推測した。すなわち、北西側予想遺物包含層限界線より南東側のいずれかの地に弥生時代から古墳時代後期初頭にかけての集落等が営まれており、中学校体育館黒褐色砂礫遺物包含層とはその痕跡物が低地に向かい流入・堆積したものとする推測である。またそれと共に古墳時代後期後半には人類の活動域は包含層の南西部に移動したのではないかと考えている。

上記の推測は、多量とは言えない出土遺物が根拠となっていることは自認するところである。今後とも層位的な確認を含め調査・研究を継続したい。

謝辞

本稿を執筆するにあたっては、福本幸夫氏に数々の有益な御教示を頂いた。また光市文化センターの石村正彦・丸岡敦雄両氏を筆頭に、光市文化センター職員の方々には多大なる厚意を頂いた。末筆ながら記してここに謝意を表したい。



※⑤～⑧に関しては、断面図は報告されておらず、文章から復元した柱状図である

図 35 御手洗遺跡・月待山遺跡主要調査地土層柱状図

[註]

- 1) 本書第1章第6節参照
- 2) 小野忠熙(1953)「第IV章島田川流域の遺跡群」, 小野忠熙(編)『島田川 周防島田川流域の遺跡調査研究報告 1950-1953』, 山口
- 3) 現在山口大学埋蔵文化財資料館に保管されている。
- 4) 福本幸夫(1966)「II 光市における先原始時代の遺跡」, 福本幸夫(編)『先原始時代の光市』, 光(山口)
- 5) 前掲註4 p.76~77
- 6) 福本氏によると、月待山遺跡から御手洗遺跡を分離させる際には小野氏に相談し、指導を得たとのことである。
- 7) ただし、中学校体育館包含層出土した遺物も工事中掘削終了時の発見であり、層位が保証されているものではないことを付記しておく。
- 8) 河村吉行(1992)「第3章 光構内教育学部附属光小学校運動場改修に伴う発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報X』, 山口
- 9) 豆谷和之・田崎美佐(1994)「第3章 光構内教育学部附属中学校武道館新営に伴う発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報X II』, 山口
- 10) 本書第1章第6節参照
- 11) 平成3年から4年にかけて実施された中学校武道館建設地での調査では、遺構内埋土から縄文時代前期(曾畑系)の土器片が出土している。
- 12) この調査の正式報告はなされていないため、調査を担当した山口大学埋蔵文化財資料館員の田畑直彦に調査内容・遺物の出土状況を確認した。